

## 会長挨拶

明治大学教育会長 田中 徹太郎

明治大学教育会長田中徹太郎でございます。

さて、これから1913（大正2）年より1920（大正9）年まで、明治大学で教鞭をとられた、植原悦二郎氏〔生年1877（明治10）年～没年1962（昭和37）年〕についてご紹介します。日本国憲法を生む土壌を育んだ1人として、彼の著書〔1910（明治43）年刊行〕を原点とした言論、研究活動に現在スポットがあてられています。

植原氏の教育者としての足跡を辿り、私達が教育者を目指す意味を考える、一助となれば幸いです。

### 「教育者としての植原悦二郎」

植原悦二郎は、1877（明治10）年長野県安曇野市に生まれ、1899（明治32）年22歳でシアトルに渡り、住み込みの家事使用人として生計を立てながら、ハイスクールを卒業。この地では、同郷の清澤湧と二年間生活を共にしています。1904（明治37）年州立のワシントン大学に入学し、卒業後今度はイギリスへ渡り、ロンドン大学経済学政治学大学院にて博士号を取得。1910（明治43）年ロンドンで英文著書『日本の政治的發展』を出版。民意の反映を軸として、英米法やヨーロッパ大陸法と比較し、大日本帝国憲法の問題点を洗い出しました。米英で「民主主義」「プラグマティズム」「自由主義」を学び、1910（明治43）年帰国。



植原悦二郎

1914（大正3）年には、『我憲政發達の9大障害』を雑誌に発表し、英文著書にはなかった元老の撤廃・軍部大臣大中将制の撤廃・教員を官吏でなくすこと・武断の排除の4つを新たに論点に加えました。この論文は、護憲運動・デモクラシーの濫觴となりました。

1920（大正9）年英国人サンソムは、商務参事官として、駐日英国大使館に赴任し約20年間勤務。植原の著書・論文に親しみ、公私に渡る交流で、大日本帝国憲法に多くの見識を得たのです。

1928（昭和3）年米国人ポートンは、現在の東京港区にあった普連土女学校（現 普連土学園中学校・高等学校）の教育奉仕のため来日。サンソムは、ポートンへの1対1のセミナーで、植原の大日本帝国憲法研究の分析と主張を伝えました。サンソムは、その後1942（昭和17）年駐米英国公使となり、同年、ポートンも米国國務省に入省。ポートンはサンソムに啓発され政策文書『日本一戦後の政治的問題』を作成。1945（昭和20）年10月5日臨時政治顧問（公使格）アッチソンは、マッカーサーへ提出した意見書にサンソムの『日本の憲法についての注釈』を添付しました。植原の主張が、こうしてサンソムやポートンらを通じ

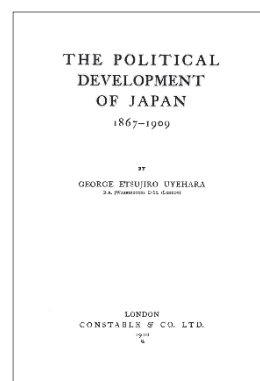
て、英米などの政策文書に多く活かされ、ポツダム宣言第10項：自由権、日本国憲法制定への道標となったわけです。このことについては、こんにちも図書館情報大学（現筑波大）の原秀成の研究を始発とし、法学、政治学、情報学、ジャーナリストなどの専門家による検証が続けられています。植原の英文著書は、また、駐日カナダ公使館員ノーマンによっても、様々な方面で紹介され、多くの読者を得ました。ノーマンは日本で敬愛された宣教師の父を持つ日本生まれのカナダ人でした。戦後GHQスタッフとして出向しています。ジョン・デューイ、シティーバンク頭取ヴァンダーリップ、第28代米大統領ウィルソン、同第29代ハーディングといった錚々たる人物たちも、植原の著書を読み、植原と面会しています。特にハーディングは、植原個人とワシントン会議の成功に向けて、長時間話し合いました。植原は、「新外交」を理解できた人物でした。

植原の主な主張をあげましょう。1910（明治43）年英文で書いた著書では、象徴天皇制を明記し、1912（大正元）年8月の論文では、美濃部達吉、上杉慎吉の両者に異を唱え、国民主権は、自明の理であるとの主張で、学術論争を挑みました。1916（大正5）年3月の論文では、「責任内閣」の重要性を、吉野作造に説いています。吉野は、1922（大正11）年刊行の『二重政府と帷幄上奏』の中核に、植原の「責任内閣」を据え軍部批判を展開しました。植原・吉野の主張は、1924（大正13）年の第2次護憲運動で「憲政の常道」として結実したのです。

こうした植原の学識を当時明治大学理事で、後に総長となった鶴沢總明が、高く評価し、1913（大正2）年明治大学に招聘しました。鶴沢は、主筆を務める雑誌『国家乃国家学』に彼の言論活動の場も設けました。

植原が明治大学で学生に講読させた原書にホブハウスの著作『自由主義』[1911（明治44）年刊行]があります。ホブハウスは、この著作で、経済活動の自由放任のみでは、格差社会が生じ、その解消には、社会保障制度の充実による、国民の健全な生活基盤向上が肝要とのグランドデザインを提示しています。石橋湛山にも多大な影響を与えた書籍でした。植原は、明治大学の学生に、戦後の日本の姿を予言するような、この原書を講読させたのです。担当の「比較憲法学」「政治学」の授業は、他学部だけでなく、帝国大学はじめ他大の学生も多く聴講に訪れ、教室は常に満員。立ち見で溢れかえりました。植原が講義で描いたのは、的確な「未来予想図」だったのです。まるで、「リベラル・デモクラシー」を説く現代の政治学者がタイムマシンに乗って出現したかのよう。

明治大学では、1918（大正7）年公布の大学令により派生した、予科政治経済学科、政治学科のカリキュラム・学習環境の改善・整備要求が、学生達により大学側に提案されました。しかし、大学との2年間の交渉では、進展が見られませんでした。急成長による学校規模拡大で財政が逼迫していましたが、その背景には、明治大学の授業料が他大と比べて、学生に負担のより軽いものであったことも、一因であったのかもしれません。学生代表・雄弁会幹事長高橋義臣は、ついに1920（大正9）年11月30日、12月1日の両日、学生大会を開き学



『THE POLITICAL DEVELOPMENT OF JAPAN, 1867-1909 (日本の政治的發展)』 1910年

長らの辞職を要求。大学は、高橋ら8名を放校処分にし、雄弁会責任者で学生に同情的であった、植原と笹川臨風を解雇しました。

しかし、大学OB、校友会の調停によりこの処分は撤回され、学生側も学長辞任要求を取り下げました。1921（大正10）年1月29日、大学は、文部省に植原、笹川の復職許可申請を提出しました。しかし、政界を巻き込んだ騒動に変質したせいか、残念ながら文部省は4月28日笹川のみ許可し、植原については復職を許可しませんでした。これを知った笹川は、自ら復職を拒否致しました。

5月16日学生約2000名が、植原の復職と私学の独立自由を求め、校歌に主張を託し、斉唱しながら文部省に押し寄せました。

『眉秀でたる若人が 撞くや時代の暁の鐘 ～権利自由の揺籃の 独立自治の旗翳し高き理想の道を行く 時代の夢を破るべく～正義の鐘を打ちて鳴らさむ 正義の鐘を打ちて鳴らさむ』

結局、学長以下4名辞職、学生側は、高橋義臣、杉町八重充ら9名放校処分3名退学処分にて事態收拾する。犬養毅は、植原を高く評価し、1917（大正6）年にすでに政界に引き入れており、この件で植原は、学問の世界を離れ、戦中・戦後を含めて34年10カ月の長きにわたり政治の世界に身をおくことになりました。

当時こうした放校処分者には、他大学への入学の門は閉ざされていました。高橋義臣は、10月10日ワシントン会議に衆議院議員として出席の植原と共にアラバマ丸に乗船。シアトルで植原の母校ワシントン大学に入学。大学院修了するまで、約11年間米国に滞在しました。そして、明治大学は、帰国した高橋義臣を受け入れる度量の大きい大学でした。

高橋は、1936（昭和11）年講師、戦後兼任教授を経て、政治経済学部教授。政治学科長にも任じられたのです。

同じく放校になった、杉町八重充は、ワシントン大学に一時在籍後、1930（昭和5）年南カリフォルニア大学大学院修士号取得。米国に残り、在米邦人の「日本語教育」に貢献。大戦中は、収容所を転々とするも、日本人代表として毅然と米国側に対応。1961（昭和36）年明治大学は、杉町の米国での社会貢献と著作を評価し、法学博士学位を授与致しました。杉町の『米国における非行少年の研究』は、明治大学出版部（当時）より刊行されています。

校歌斉唱は、植原の「日本のくにを立ち上げるための決まり」の凄みに、未来を託そうとした学生たちの咆哮でした。植原は、平和主義・国民主権・人権尊重の「未見の日本国憲法」を教えたのです。明治大学校歌に込められた建学の精神に、実証的な学びが相互関連し、学生達には、日本の歩むべき道筋がはっきり見えたのです。植原は、研究者としてだけではなく、優れた教育者であったのです。

しかし植原は、政治家としては、孤独と屈折の持ちきれないほどの悲しみを抱え終戦を迎えました。

今、私たちは、明治大学の歴史の中にある人物に学び、教育者としての使命を問い直す良い機会かもしれません。